

# 相方城跡研究ノート

中井 均  
(織豊期城郭研究会)

## I

昨春、備陽史探訪の会の方々と相方城跡を見学する機会を得た。筆者にとつて高校生の時に見学して以来、実に二〇数年ぶりの相方城跡との再会であった。今回の見学では城跡を詳細に調査することができ、長い疑問に思っていた、天正年間有地氏築城説に対し、筆者なりの解答を得ることができた。織豊期の石垣を比較検討することによって、相方城跡の石垣構築年代を慶長五年（一六〇〇）関ヶ原合戦の直前と考え、築城者については毛利氏が直接普請したものと結論しておいた。その理由については拙稿を参照されたい（註1）。

拙稿刊行後、楠見久、片山貞昭氏の論考および小都隆氏の論考を読む機会があった。楠見、片山論文における石垣構築の見解は筆者の考えとほぼ同様のものではあった。また築城年代についても明確な年代は避けてはいるものの、「この石垣は関ヶ原の戦い以後に作られた可能性があることになる。」としており、その年代観も近いものであった（註2）。

また、小都氏は「萩藩閩閩録」の記載に注目し、有地氏は「備後有地之城主也」であり、有地之城＝相方城とすることに警鐘を鳴らしている。その年代については出土瓦の年代とはギャップがあるとしつつも、一応

「毛利氏が文祿から慶長期（一五九二～一六〇〇）にかけて直轄城として整備したと考えるのが妥当のようである。」としており、やはり同様の年代観を示しておられる（註3）。

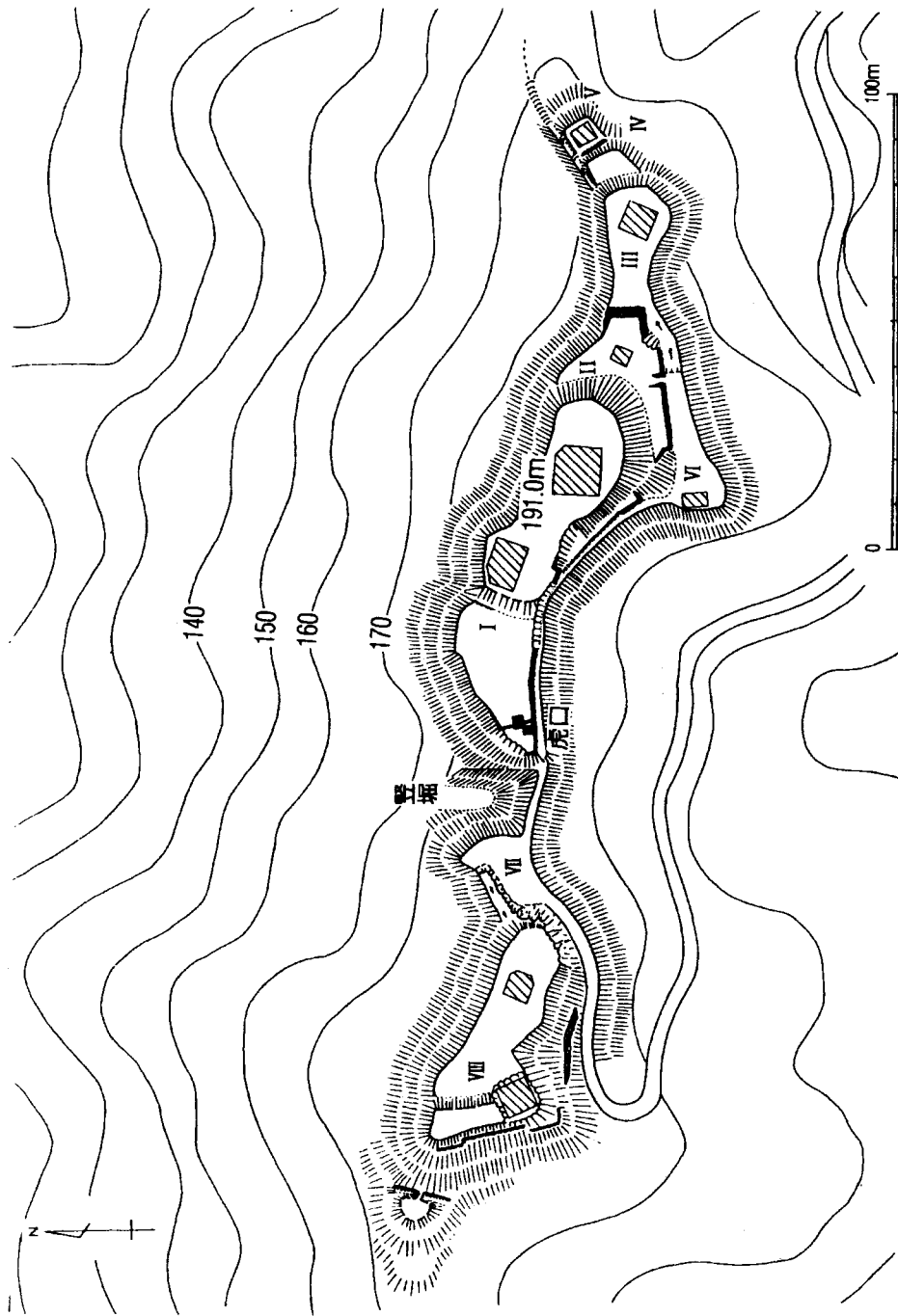
このように石垣の構築技術面からの年代観については、ほぼ結論が出たのではないだろうか。

## II

ところで、これまでの相方城跡についての関心は、その石垣であった。拙稿では従来あまり検討されることになかった平面構造、つまり縄張りについて述べてみたい。

この縄張りについても、当然石垣構造が大きく関わっていることはまちがいない。ところが北面にはいっさい石垣が認められないのである。この点が相方城跡を考えるうえで、重要な問題を含んでいるようである。おそらく三つの考えが可能であろう。

第一の可能性は、城が未完成であること（註4）。第二の可能性は、破城（城割り）もしくは何らかの理由で北側の石垣だけが取りはずされた。第三の可能性は、築城当初から北面は石垣としなかったということである。



为1图 相方城跡中心部概要图

第一の可能性については、年代観のギャップは存在するものの、城に葺かれていた瓦の出土することより、作事も完成していたと考えられることから、普請面だけが未完成であったとは考えられない。第二の可能性については破城ならば南面石垣も何らかの形で破壊する必要があるにもかかわらず、石垣天端まで完存している。さらに北面のみを破壊したとしても二、三の石材が残存してもよいはずであるが、栗石すら認められない。こうした点から破城の結果、北面に石垣が認められないという可能性はきわめて低く、むしろ築城当初から北面には石垣を用いなかったと考えられよう。

ではなぜ北面に石垣を構築しなかったのであろうか。こうした事例は小数ではあるが存在する。

黒井城跡(兵庫県春日町)は戦国期赤井氏の手によって巨大な城郭となる。天正七年(一五七九)赤井氏滅亡後、明智光秀の部下斎藤利三が入城し、さらに同十年には羽柴秀吉の臣堀尾吉晴の管理するところとなる。中心部は南面にのみ高石垣を用い、北面は切岸のみである。こうした構造を片面石垣と呼称しており、南側を強く意識した結果と考えられている。事実南山麓に城下が形成され、主要街道も南山麓に添っている。つまり、戦国期の土づくりの城を天正七、十年の間に改修したものが片面石垣の主郭部であり、その年代は残存する虎口形態とも整合している(註5)。

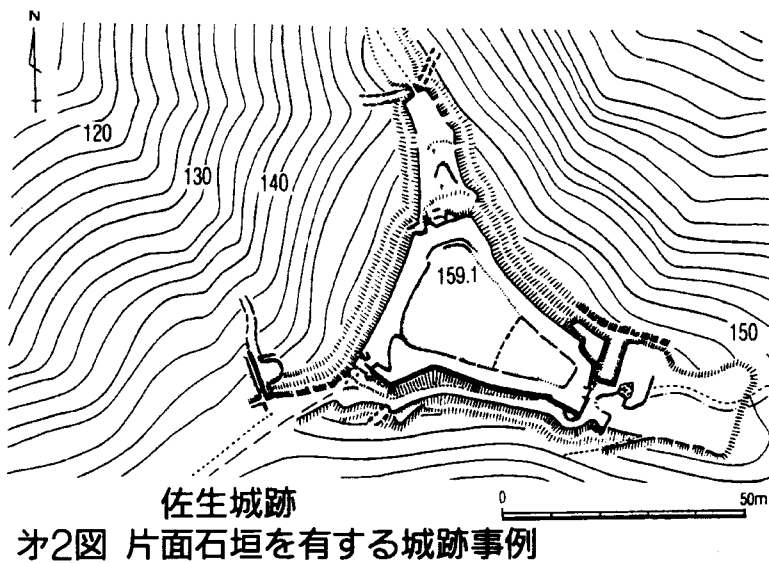
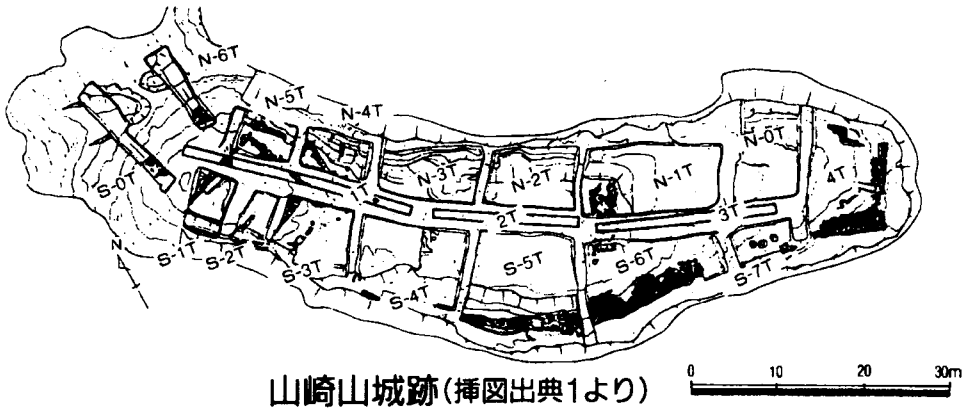
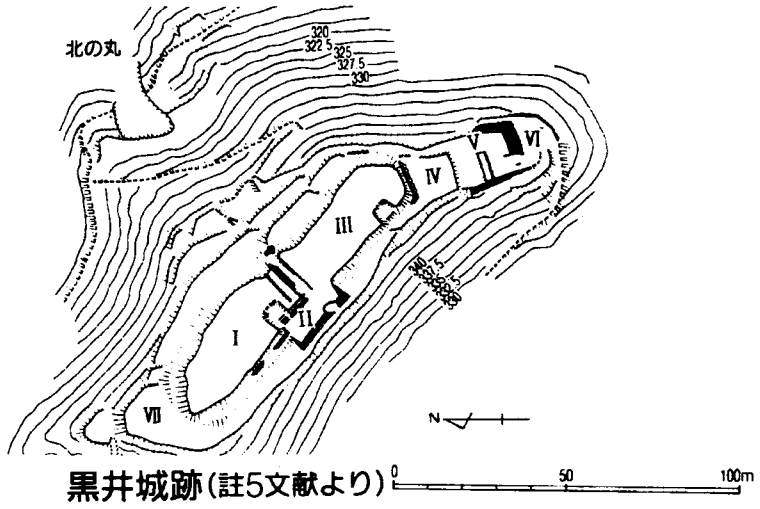
山崎山城跡(滋賀県彦根市)は従来在地の国人山崎氏の城で、土づくりの城と考えられていた。ところが一九九三、四年にかけて実施された発

掘調査の結果、見事な打ち込みハギの石垣が検出された。石垣は南面のみ構築されており、やはり南方を強く意識した構造であることが読み取れる。おそらく国人山崎氏の手になるものではなく、『信長公記』巻十五に「(天正十年)四月廿一日、濃州岐阜より安土へ御帰陣の処に(中略)山崎に御茶屋立置き、山崎源太左衛門一献進上候なり。」とある、岐阜、安土間に設置された信長の休息施設として築かれた可能性が高い。南山麓には信長が築いた下街道(後の朝鮮人街道)が通り、その街道を強く意識して石垣が築かれている。

佐生城跡(滋賀県能登川町)は戦国時代、近江守護職佐々木六角氏の臣、後藤但馬守が築いたものと伝えられている。その石垣は織豊系城郭の石垣よりも古いタイプで、観音寺城跡の石垣に類似しており、伝承とは一応年代は整合する。観音寺城の北方防衛を担う城で、防御正面は当然北面となる。にもかかわらず石垣は南方にのみ築かれている。これは南山麓を走る東山道(後の中山道)を強く意識した結果と考えられる。その築城年代は永祿十一年(一五六八)信長の近江進攻の直前のものである。

これら片面石垣の諸城が戦国末期から織豊期にかけて築城されたことは注目される。石垣を築くことによって、山麓から見上げたとき、視覚的に威圧感を与えたことは想像に難くない。特に事例に取り上げた三城跡は片面石垣がすべて主要街道側に築かれており、「見せる城」としての石垣構築を如実に示している。

ところが相方城跡の場合、主要街道は北側に走っており、街道から石



垣を見ることはできない。どうも相方城跡の石垣は視覚的效果をねらった片面石垣ではないらしい。この疑問に答えてくれるのは城山南北方向の地形断面図である。城跡北側は芦田川が眼下に流れ、さらに山頂へは急峻な崖地となっている。これに対して南側はゆるやかな傾斜地となっている。こうした自然地形の弱点を克服するため、南方にのみ石垣を構築したのではないだろうか。

### III

平面構造はいたって簡単な連郭式の縄張りで、織豊期の石垣造りの城のような複雑な構造は認められない。だからといって、石垣は伴うものの城自体は古い、という説は成り立たない。

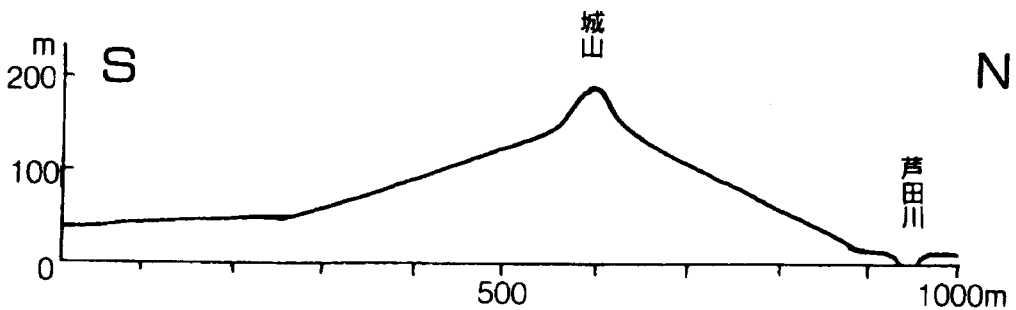
それを示すものがI郭西端の虎口である。従来このI郭西端の虎口は枡形虎口として評価されてきたものであるが、いわゆる通常の枡形虎口とは形状を異にしている。

相方城跡の虎口はI郭の西端に一段低く、五×五m規模の小さな曲輪を配し、そこを枡形空間としている。しかしこれでは本来内枡形虎口の有する防衛性、つまり枡形内に進入した敵を三方向から攻撃することはできない。わずかにこの空間に進入した敵に対しては東側I郭から一方向のみしか攻撃できないのである。これは普請面からのみ考えた評価である。

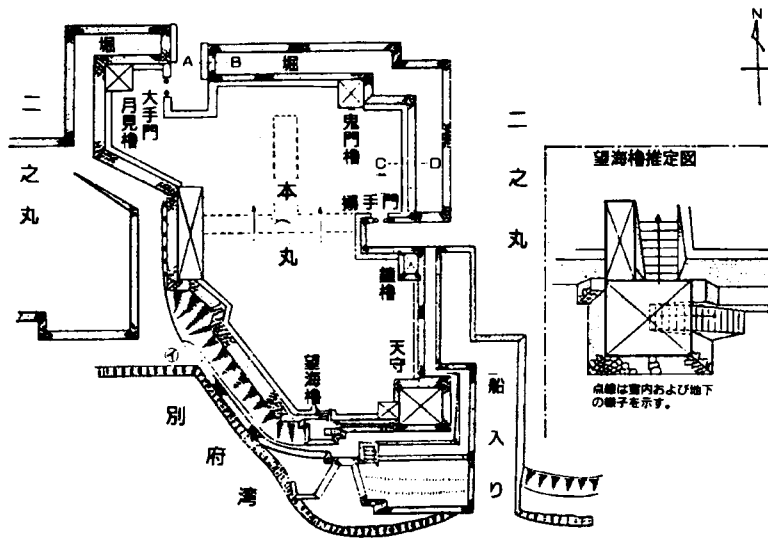
片面石垣同様類似する事例を検討してみると、日出城跡（大分県日出町）本丸の望海櫓とほぼ同様の平面構造であることがわかる。日出城は慶長六年（一六〇一）木下延俊によって築城され、望海櫓は本丸の南側

に突出して築かれており、櫓内部を通路とする城門の役目も兼ねていた。このように隅櫓と城門を兼用するものとして現存するものに姫路城跡（兵庫県姫路市）の「に」の門がある。

相方城跡の虎口も、小規模な曲輪空間全体に櫓が建てられ、その内部を通じてI郭へ至る施設だったと考えられる。このようにI郭の虎口は単純な内枡形虎口ではなく、櫓と対になって機能する

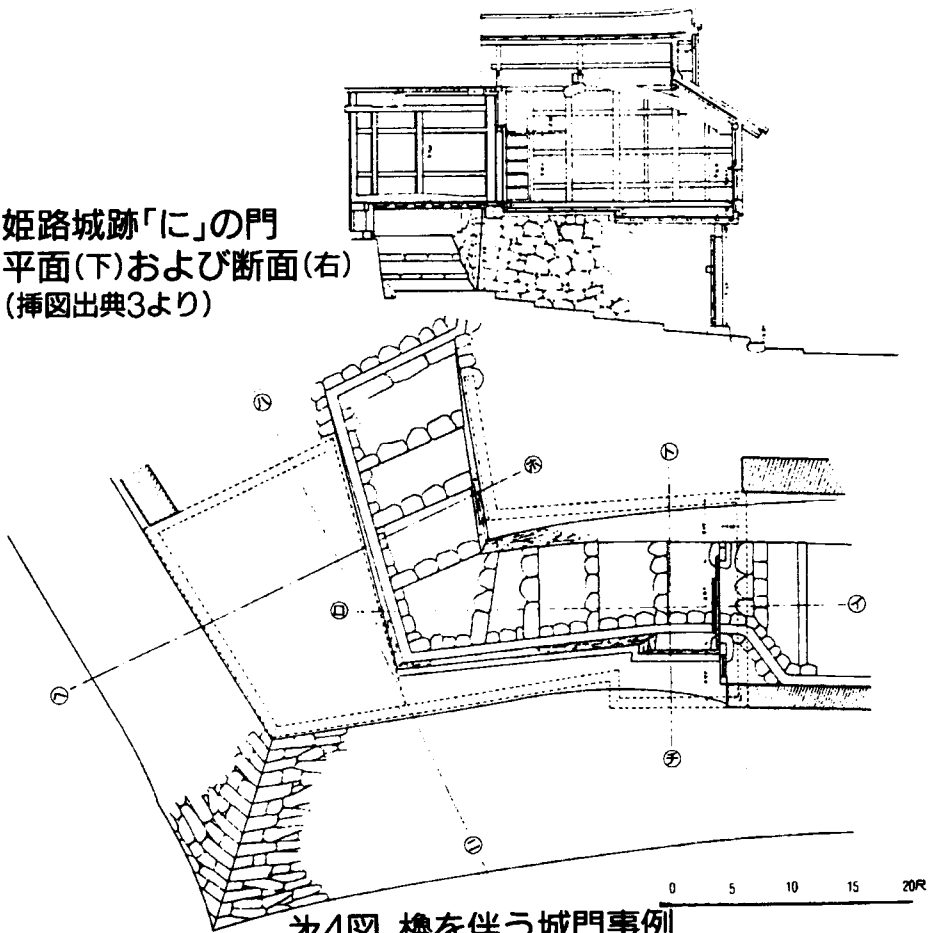


才3図 相方城跡(城山)南北方向地形断面図  
(註2文献より)



日出城跡本丸付近要図(挿図出典2より)

姫路城跡「に」の門  
平面(下)および断面(右)  
(挿図出典3より)



オ4図 櫓を伴う城門事例

虎口として改めて評価すべきであり、決して単純な古いタイプの枡形虎口ではなく、慶長年間の極めて新しいタイプの枡形虎口として認識すべきであろう。

#### IV

『山城探訪—福山周辺の山城三〇選—』の刊行によって、相方城跡の規模が石垣周辺部だけでなく、広範囲に展開する大規模な中世山城であることがわかった(註6)。にもかかわらず現在石垣の認められるのは主郭Ⅰ、Ⅱ郭、Ⅷ郭およびⅣ郭の一部のみである。他は削平地(曲輪)と堀切によって構成される、典型的な中世山城である。これらは同時期に築城されたものではなく、明らかに時期差のある二つの城跡が存在することを示している。こうした二時期の城跡に、天正年間の有地氏段階の土づくりの城と、慶長五年頃の毛利氏段階の石づくりの城を想定することが最も妥当である。

#### V

さて拙稿では、相方城跡について石垣の技術面からではなく、従来はほとんど目を向けられなかった、片面石垣、枡形虎口、新旧二つの城という視点から考えてみた。このような視点からだけで相方城跡の築城年代、築城主体者を導き出すことは不可能であるが、相方城跡を研究するにあたって、新たな視点になればと、問題を提起したものである。

筆者自身は前拙稿で詳細に考察したように、相方城跡の石垣は天正年間に国人有地氏によって築ける技術ではなく、慶長五年の関ヶ原合戦に備えて毛利氏が直接築いたものと考えている。今回検討を加えた片面石

垣や枡形虎口についても全国的な事例と比較することによって、この慶長五年という年代観とは矛盾するものではない。

ただ何度も繰り返すが、出土する瓦は天正年間の様相を示しており、そこには二〇年間のギャップが存在している。この点が今後の相方城跡研究の最大の課題である。出土した瓦は確かにコビキ技法から天正期に生産されたと考えられるが、軒平瓦の瓦当文様に注目すると、中心飾りが宝珠文であり、これは城郭のために生産されたものではなく、明らかに伝統的な寺院の瓦のようである。あるいは慶長五年段階の毛利氏領の備後では城郭瓦を生産する体制がなく、寺院の瓦を生産していた工人を動員した結果、古い様相の瓦が葺かれたのか、あるいは瓦については寺院から転用した結果なども考えられる。今後は軒平瓦や軒丸瓦の文様構成と近郊の社寺の瓦との関係を追求していくことによって、石垣との年代差も矛盾なく説明できるのではないだろうか。

#### VI

ここ数年、織豊期の城郭研究をおこなってきた筆者にとって、石垣によって構築された城の築城主体者や年代はある程度推定することができるようになったと自負もしていた。ところが相方城跡についてはなかなか明確な答を出すことはできなかった。一応の結論として毛利氏が関ヶ原合戦に備えて慶長五年頃、有地氏の城跡に新たに石垣による相方城を築城したとしておくが、まだそれとても自分自身で納得しているわけではない。実に難解な城跡である。織豊期城郭について卒業試験に出されたような城跡である。その無言の間に答えるべく多くを勉強させてくれ

る城跡である。しかし筆者はまだ卒業できそうにない。

2. 藤崎定久『日本の古城』5補遺(西日本編) 一九七七 東京・新人物往来社

3. 文化財保護委員会『国宝重要文化財姫路城保存修理工事報告書Ⅰ(附图)』一九六四

註1 中井均「相方城跡の石垣についての一考察」(『中世城郭研究』

第9号 一九九五 東京・中世城郭研究会)

註2 楠見久、片山貞昭「相方城跡の石垣」(『芸備』第24集 一九九五

広島・芸備友の会)

註3 小都隆「相方城跡の研究その後」(『芸備』第24集 一九九五

広島・芸備友の会)

註4 尾多賀晴悟氏は『山城探訪―福山周辺の山城三〇選―』(一九九

五 広島・備陽史探訪の会)の中で、「慶長五年ごろに築造中止となり廃城になったと考えられる。」(P102)と、未完成説を述べている。

註5 黒井城跡の概要は『史跡黒井城跡保存管理計画策定報告書』

(一九九三 兵庫県・春日町)によった。

註6 一九九五 広島・備陽史探訪の会刊

《挿図出典文献》

1. 清水千恵「山崎山城跡の発掘調査について」(『滋賀県立大学人間文化シンポジウム』城と町を掘る――中世から近世へ――一九九五)